

# 日本簿記学会ニュース

No. 41:7 / 2006

## 《部会の経過報告》

第22回関西部会は平成18年5月27日(土)に松山大学(準備委員長:村上宏之氏)にて、第22回関東部会は平成18年6月17日(土)に日本大学(準備委員長:今福愛志氏)にて、各々開催されました。詳しい内容は本紙部会記をご覧ください。

## 《大会のご案内》

第22回全国大会の詳細が下記のりに決定いたしましたので、お知らせいたします。

開催日 8月28日(月)から8月30日(水)

場所 兵庫県立大学(神戸市)

統一論題 「公会計と複式簿記」

第1日(8月28日)

学会賞審査委員会 理事会

第2日(8月29日)

参加者受付 11時45分～17時25分

会員総会 12時15分～13時15分

学会賞受賞報告 13時20分～13時40分

研究部会報告 13時45分～14時55分

統一論題報告 15時15分～17時25分

司会・座長 藤井秀樹氏(京都大学)

報告者 宮本幸平氏(星城大学)

柴健次氏(関西大学)

泉宏之氏(横浜国立大学)

亀井孝文氏(南山大学)

懇親会 18時15分～19時45分

第3日(8月30日)

参加者受付 9時30分～15時00分

自由論題報告 9時50分～12時00分

統一論題討論 13時00分～15時00分

本大会のプログラムは日本公認会計士協会CPE認定研修として承認されております。なお詳細については、兵庫県立大学経営学部ホームページ(URL:<http://www.biz.u-hyogo.ac.jp/>)をご参照下さい。

## 《全国経理教育協会創立50周年記念式典について》

去る平成18年5月26日に仕団法人全国経理教育協会(会長:麻生太郎氏, 理事長:菅原一博氏)の創立50周年記念式典及び記念祝賀会が開催された。日本簿記学会からは、新田忠誓副会長(一橋大学)が出席し祝辞を述べるとともに、日本簿記学会より祝電が送られた。また、当式典に於いて日本簿記学会の功労に対して全国経理教育協会から感謝状が贈られた。全国経理教育協会は、簿記経理教育の普及向上並びに産業経済の発展に寄与することを目的に昭和31年に全国商経学校校長協会として創立され、昭和34年に全国経理教育協会に改称し、その活動を行っている。

## 《お詫びと訂正》

本紙No.40:12/2005の入会会員名簿及び2005年12月20日に発行されました日本簿記学会会員名簿において、<準会員>松原沙織氏(横浜国立大学大学院)が掲載されておりませんでした。ここにお詫び申し上げますとともに、訂正の掲載をさせていただきます。

## 《会費振込のお願い》

本年度(2006年度)の会費を未納の方は、下記宛に早急にお振り込みください。なお、住所・所属の変更があった場合は、会費振込時に振替用紙にご記入いただくか、連絡事務所に書にてお知らせください。

口座番号 00190-9-23806 加入者名 日本簿記学会

## 日本簿記学会第22回関西部会記

準備委員長 村上宏之  
松山大学

日本簿記学会第22回関西部会は、2006（平成18）年5月27日（土）に、松山大学で開催された。参加者は78名であった。

今回の部会は、統一論題報告・討論のみの開催であった。統一論題「簿記の記録機能」の主旨説明の後、原田満範氏（松山大学）の司会のもとで統一論題報告が行われた。その概要は、次のとおりである。

第1報告「簿記会計史の観点から見た複式簿記の記録機能」で、桑原正行氏（香川大学）は、現代の複式簿記の定義を説明され、簿記の記録機能とは何であるのか、また、記録機能以外に簿記にはどのような機能があるのかという問題提起をされた後、記録機能に焦点をあててその内容について説明され、20世紀初頭におけるアメリカ簿記会計に関する文献を中心にアメリカにおける簿記論（学）の特徴を明らかにされた。最後に、桑原氏は、①簿記の機能が財産（管理）記録・計算から期間損益記録・計算へ移行してきたが、②経営管理目的からいえば複式簿記は決して決算整理や財務諸表の作成を第一目的とするものではなく、③簿記の本質が日々の（期中）取引を記録することにあることを再認識する必要があるとまとめられた。なお、桑原氏の報告に対して、藤川元久氏（元広島女子商短期大学）と野村健太郎氏（愛知工業大学）から確認のための語句質問が行われた。

第2報告「意思決定に有用な簿記システムについて」で、羽藤憲一氏（近畿大学）は、有用かつタイムリーな情報を提供できることを目的として、提案する簿記システムで利用する概念を説明された後、提案するモデル化法の具体的記述方法、モデル化法を実現するフレームワークおよびプロトタイプモデルを利用した例を説明された。最後に、羽藤氏は、提案するモデル化法の有効性として、本モデル化法では①過去から現在、現在から将来にわたる価値の残りの状況を予測、計画し、実際の物の動きと計画の差および各種状況の変化に対しダイナミックな計画・管理を一元化を行うことが可能になること、②現場管理者の意思決定により有用な情報をタイムリーに提供するとともに、いろいろな価値と工程を同期的に管理することで、製品原価の算定がより正確になることを挙げ

られた。

第3報告「複式簿記の記録機能と財務諸表作成機能との融合－XBRL GLによる実現－」で、坂上学氏（大阪市立大学）は、複式簿記システムの分析視点から複式簿記の機能を記録機能と財務諸表作成機能に分けて説明された後、財務情報データの国際標準としてのXBRL（eXtensible Business Reporting Language）、その中でも仕訳データを記述するためのGL（General Ledger）を特に取り上げられて、XBRL GLが扱う範囲、XBRL GLの構成要素、XBRL GLで表現できるものを説明された。最後に、坂上氏は、XBRL GLの可能性として①「財務諸表の作成」を意識せず、取引の忠実な把握に専念できること、②したがって、簿記本来の機能の一つである管理目的にも活用することが可能であること、③仕訳データの記述は複式記入の原則に基づいており、複式簿記の考え方は今後も引き継がれていくこと、④XBRL GLが扱う領域は「帳簿組織」の問題に深く関わっていくことを挙げられた。

引き続き、原田氏を座長として統一論題討論が行われた。討論では、桑原氏の報告に対して山田康裕氏（滋賀大学）、辻川尚起氏（香川大学）、武田隆二氏（大阪学院大学）、河崎照行氏（甲南大学）および藤井秀樹氏（京都大学）から、羽藤氏の報告に対して河崎氏、武田氏、渡辺泉氏（大阪経済大学）および藤井氏から、坂上氏の報告に対して河崎氏、武田氏、藤川氏および藤井氏から質問や意見が提出され、活発な議論が展開された。最後に、座長より、IT化した現代においても、簿記のたす役割はますます大きくなっており、重要視されているとの締め括りが行われた。



## 日本簿記学会第22回関東部会記

準備委員 村田直樹  
日本大学

日本簿記学会第22回関東部会は、2006年6月17日(土)に日本大学経済学部において開催された。参加者は院生を含め133名で、統一論題「組織における簿記の役割と課題」のもと、活発な議論が繰り広げられた。

日本簿記学会会長森川八洲男氏(明治大学)の挨拶の後、統一論題報告に先立ち座長の今福愛志氏(日本大学)より、統一論題設定の主旨説明とともに、各報告者に対して、事前に検討すべきいくつかの論点を提示したことが報告された。その論点とは、①さまざまな「自立的」組織において複式簿記がどのように利用され、機能しているのかについての実態をレビューし、②そうした作業にもとづいて組織「特有の」簿記の役割と課題が明らかにされ、③つづいて組織の違いを超えて簿記の役割と課題があるとするばなにか、検討することである。各報告者の論題と報告要旨はつぎのとおりである。

陣内良昭氏(東京経済大学)「企業における簿記の役割と課題—複式簿記と財務会計の関係を中心として—」では、企業会計における複式簿記の普遍性を基礎として、簿記学方法論の再構築を念頭に置きつつ企業組織における簿記の意義と課題が報告された。まず、企業組織と複式簿記の関係について、廣本説、岩田説、木村説を批判的に紹介した上で、木村説における勘定理論を発展させるためには、会計システム研究の出発点を決算整理前残高試算表におくべきであると主張する。さらに、会計システムの全体は財務諸表ではなく、合計試算表であり、合計試算表が財務諸表に転換されるシステムが重要であると指摘した。そして、決算整理・修正の内容を峻し、そのうち貸借対照表項目の価値の直接的修正に関する会計上の置づけを明確化することにより、企業組織の内(労働・分業)と外(所有・ガバナンス)への情報提供とアカウンタビリティの質を高める必要があると主張した。

大塚成男氏(千葉大学)「地方公共団体における複式簿記の利用と課題」では、複式簿記を資金の調達と運用の状態が統合的に記録され、広範な組織活動の記録・管理を前提とし、ストックの記録とフローの記録が統合されることで、主体の状態と活動内容とが有機的に統合された記録の体系が整備されているものと定義した上で、埼

県草加市や東京都の事例を分析し、組織の目的や構造に対応した簿記システム構築の必要性が報告された。

挽文子氏(一橋大学)「製造業における工業簿記・原価計算の役割と課題」では、廣本氏の定義に基づき、自立的組織を①各単が自立的判断を行い、②その関係は相互に自由度を持ったものであり、③自由度を持っているが頻繁に情報交換をして調整がはかられ、④各作業者は単に自立的であるだけでなく、市場と直接結びついている組織とした上で、この自立的組織として京セラ株式会社を取り上げ、分析を行った。同社の内部取引に焦点をあて、複式簿記の目的、利用状況、機能についての検討が報告された。その結、工業簿記及び原価計算は企業の経営管理に役立つことを主眼とした会計であり、企業が直している状況や目的に応じて、そのシステムを構築・運用することが重要であるという主張がなされた。

その後休憩を挟んで、今福愛志座長の司会進行のもと、討論が開始された。まず、各報告者相互間のコメントの後、質疑に入り、梶田龍三氏(大分大学)、中野貴元氏(グッドウィル・グループ(株))、才塚定雄氏(税理士)、新田忠誓氏(一橋大学)、夏目重美氏(亜細亜大学)、横山和夫氏(東京理科大学)、安藤英義氏(一橋大学)、壹岐芳弘氏(日本大学)から質問や意見が出され活発な議論が展開された。最後に今福愛志座長による総括がなされ、安藤英義氏の意見に関連して、会社法改正にともなう資本概念と資本額の不確実性が生じているが、簿記(理論)としてそれをどのように受け止めるべきか。法律と簿記の関係という点に照らすと、簿記は法の制約を受けるのではなく、経営管理目的の展開に対応して柔軟に展開してきたのではないかという視点が提示された。これらの視点から3名の報告内容を総括し、今後の議論の展開を期して部会の閉会が宣せられた。



## もうひとつのダ・ヴィンチ・コード

前会長 戸田博之

全世界で5,000万部売れたという「ダ・ヴィンチ・コード」は、最近映画化されたこともあって、ちょっとした「ダ・ヴィンチ・ブーム」を起こしている。われわれ簿記・会計の研究に携わる者なら、このダ・ヴィンチと「スンマ」を著したルカ・パチョーリとの関係を知らぬものはないであろう。そこで私は、それに関連するふたつのエピソードを記したいと思う。

1949年は、「スンマ」出版記念500年の年であったので、日本簿記学会として記念行事が企画された。私は武田隆二会長（当時）から、イタリア史に造詣の深い塩野七生さんに記念講演を依頼する役目を仰せつかりフィレンツェに赴いたが、見事に当てがはずれた。その代わりにというわけではないが、武田先生は、急速、美術史学をご専攻の加藤哲弘先生（現 関西学院大学教授）に講演を依頼された。加藤先生のご講演は、私にとってたいへん説得力に富むものであった。記憶によれば、その要旨は次のようであった。

ルカ・パチョーリとレオナルド・ダ・ヴィンチが長い間親交があったことは夙に知られている。しかし、その接点は何であったかというのがご講演のポイントであった。当時のイタリアの画家たちは、例外なく王侯貴族（たとえばメディチ家）などの庇護のもとにあり、庇護者たちの気に入るルネッサンス風の絵を画くには、いわゆる「遠近法」の技法を取り込むことが必須であった。

その後知ったことだが、「遠近法」には「線遠近法」と「空気遠近法」があり、たとえば「モナ・リザ」や「最後の晩餐」にはそれらの技法が巧みに取り入れられているとのことである。そしてこの「遠近法」を究めるには、幾何や比あるいは比例を基礎的に勉強する必要があった。ダ・ヴィンチもまたその例外ではなく、彼は数学者パチョーリから多くを学んだようである。つまり「遠近法」の研究が二人を結びつける絆であったわけである。

次に、左の絵を見ていただきたい。この絵は、拓殖大学の三代川正秀教授によって提供された「モナ・リザを描くダ・ヴィンチ」である。中央で絵筆を持つダ・ヴィンチ、モデルをつとめるマントヴァ公妃のイザベッラ・デステ、来客のうち向かって左側二人目の僧侶姿はパチョーリ、横の若者はウルビーノ公ヴィードバルドかあるいはラファエロ（1483～1520）といわれている。

実はこの絵は、1924年に神戸大学の宮田喜代蔵博士

（1977年ご逝去）がヨーロッパに留学の折、ミラノのサンタルチア・デール・グラツィエ教会の「最後の晩餐」を鑑賞しての帰路、とある骨董屋でこの色刷り（？）の絵を見つけられた。帰国ののち、故平井泰太郎教授（追悼記念事業会刊行『種を播く人』）や故小島男佐夫教授（『簿記史論考』）によって紹介（転載）された。



その後、三代川教授は、この原画が収蔵されている「パリの国立文書館」を訪ねられ、原画をポジ・フィルム（白・黒）で入手されたのだが、これは1845年ユーメ・ブリューヌ・パジェスの作（ポール・プロスペール版画、サイズ60×42cm）、と判明した。教授は1993年に、Accounting Arithmetic & Art Journal, The Pacioli Society Japan, No.3) にこのコピーを掲載され「誰かこの絵の行方を知りませんか？」と広く呼びかけられた。ちなみに、宮田博士が持ち帰られたという絵は今どこにあるのか、あるいは一部で伝えられているように、はたして色刷りであったのか、いまだに不明である。

「ダ・ヴィンチ・コード」は、簡単にいえば、シオン修道会の秘密の暗号がダ・ヴィンチの絵によって解き明かされるというストーリーである。しかし、以上に述べた「遠近法」をめぐる加藤先生のご講演と「モナ・リザを描くダ・ヴィンチ」の絵は、パチョーリとダ・ヴィンチの接点を解き明かし、またふたりを中心とした、ルネッサンス時代の華やかな社交界をイメージさせる、私にとってのまさに「ダ・ヴィンチ・コード」なのである。

発行所 日本簿記学会事務局  
編集兼 発行人

連絡事務所  
〒101-0021 東京都千代田区外神田5-1-15  
株式会社白桃書房  
e-mail boki@hakutou.co.jp